

## アメリカで言えない 10のこと

ルイス・カナレス 著  
渡辺 貴代子 訳

私は刺激的で話題的になるような本を読むのが好きである。自分を鼓舞し、思考の糧を与えるものだが、時にそれは伝統的な知識に反することもある。Larry Elder のベストセラー、“The Ten Things You Can't Say In America” (2000) も、そのような本だった。

ロサンゼルスプライムタイムのNo. 1 ラジオトーク番組、The Larry Elder Show のホストであるLarry Elderは、この本の出版で最も話題のアフリカ系アメリカ人となった。著者は誰も話そうとしないアメリカの公的システムの真実を語り、アメリカの指導者達が明らかにされるのを恐れている事実をさらけだしている。さまざまな問題の中でもアメリカの最大の問題は、犯罪や人種差別、荒廃した学校だけでなく、「私生」(第5章)であると述べている。麻薬に対する戦争は「第二のベトナム戦争であり、われわれはまたも戦争に負けた」(第9章)

Joe R. Feagin, Hernan Vera, Pinar Batur 共著の“White Racism” (2001) を読み終えたころ、私はケーブルテレビでLarry Elder が著書の中の2つを紹介しているのを聞いた。黒人は白人よりも人種差別主義者で、白人の謙遜は黒人の人種差別主義より悪いという主張は、読み終えたばかりの“White Racism” とまったく正反対の主張だった。

「この本を読まなければ」と思いながら、インタビューを見続けた。2001年の夏、アメリカから日本に帰る私の荷物の中には、話題のこの本が入っていた。実を言えば、9月11日にテロリストがアメリカを攻撃するという事件が起こるまで、本書はアメリカ国内で、最も話題の本だったのである。

私生と麻薬についての主張以外にも、メディアについての第3章「メディアの偏向報道は本場で、

広範囲で破壊的」と健康保険についての第8章「健康保険「危機」など存在しない」、銃規制についての第10

章「銃規制主義者 - 血ぬられた手で主張する良き人」など、アメリカでは口に出して言えないさまざまなことがある。だが、最初の2章「黒人は白人より人種差別主義者である」と「白人の謙遜は黒人の人種差別よりもっと悪い」ほど、読者の反響を呼んだものはなかった。

初期の奴隷貿易の頃から現代まで、何世紀にも渡って白人の不正義の歴史を刻みつづけてきたアメリカ。K. K. K.の悪夢は誰もが知っている。フィクションであれ現実であれ、本や映画も、白人の人種差別という背徳行為をさらけ出す一因となった。Harriet Beecher Stowe は『アンクル・トム的小屋』“Uncle Tom's Cabin” (1852) で年老いた黒人奴隷の受けた傷痕と人間の尊厳を語り、Alex Haley は、アフリカから奴隷として連れてこられた祖先の歴史をさかのぼり、『ルーツ』“Roots” (1976) を書いた。(この記念碑的作品で彼は1977年のピュリッツァー賞を受賞した。) Martin Luther King, Jr., Malcolm X, Nelson Mandela やその他の黒人指導者の伝記には、白人の人種差別主義者から受けた仕打ちが数々のエピソードで語られている。映画では『夜の犬捜査線』“In the Heat of the Night” (1967)、『ミシシッピー・バーニング』“Mississippi Burning” (1988)、『アミスタッド』“Amistad” (1997)、『ハリケーン』“The Hurricane” (1999)、クラシックの名作では『アラバマ物語』“To Kill a Mockingbird” (1962) などがある。それゆえ、Larryの黒人による人種差別の主張にアフリカ系アメリカ人はショックを受け、白人の読者は私も含めて驚いたのである。

Larryによれば、いかなるアフリカ系アメリカ人

